

平成14年8月(2002年) No. 440

## 第42回OMC映像フェスティバル プログラム決まる

来る10月6日(日曜日)午後1時より阿倍野市民学習センターで開催される「第42回OMC映像フェスティバル」の作品が、このほど諮られた世話役会及び事務局で次の通り決定しました。今年は良い作品が集まり、候補として19本がノミネートされたのですが、15本までという制約上、心苦しくも4本を降ろさざるを得ませんでした。出来るだけ新しい会員さんの作品も入れようと選考には苦心しました。若干不満の残る作品もありますが、まだ期日もありますので先輩諸氏に助言して頂きまして、少しでも良い作品を目指して最後の手直しを期待しております。

### ■プログラム(敬称略)(上映順)

1)阿蘇路あそBOY:江藤洋司 9'42"、2)延暦寺の諸堂めぐり:渡辺雄史 5'30"、3)アルセンチンタンゴのさと:上総修一郎 11'30"、4)飛騨古川のなごり雪:森口吉正 7'38"、5)月読神社秋祭:江村一郎 6'00"、6)妹夫婦のお引越し:安居良枝 10'00"、7)大阪の渡し:安居利次 8'30"、8)島の響(撮影会作品):藤原純三 16'53"、9)大木先生と子供たち:西村光雄 13'40"、10)あばれ御輿:前田茂夫 12'10"、11)霖雨秋景:河合源七郎 5'20"、12)弥勒菩薩:那須典彦 13'40"、13)心の故郷紀行:有村博 9'55"、14)負の遺産:関剛 6'40"、15)炭に生きる:合原一夫 11'53"、以上15本。

### ■全国映像コンテスト入賞おめでとうございます

全国ビデオ映像コンテスト(東京アマチュア映像祭主催)

入賞:合原一夫「私の町に起こったこと」8分。

■予告:10月例会は第3土曜日19日、11月例会も同じく第3土曜16日となります。いずれも会場が学習センター主催行事で使えない為。

### 8例会のお知らせ

8月例会は24日(第4土曜日)午後6時より、阿倍野市民学習センターで行います。残暑厳しい時ですが会場は避暑気分です。どうぞ作品をお持ちになってお集まりください。お待ちしております。

## 作品研究会のレポート

例会日の7月27日、13時30分より阿倍野市民学習センター特別会議室にて開催。例会の一般会議室と違って、立派な部屋（但し料金は3倍）でゆったりとした感覚で研究会が開かれた。公開映写会の作品の絞り込みも近いとあって、映像フェスティバル出品候補新作が9本のうち7本も出され、質の高い研究会となった。

1. 優良子ども会発表会：岡本至弘さん8' 20"：久方ぶりの岡本作品。作者は子ども会役員からようやく解放された由。この記録も脚本次第では良い作品になり得る。

2. あばれ御輿：前田茂夫さん12' 10"：香川県の或る小さな町で昔から伝わる変わったお祭りの記録。顔に色を塗ったり、池に人を投げ込んだり、見せ場はあちこちにあった。

3. 妹夫婦のお引っ越し：安居良枝さん10' 00"：7月例会で発表されたものからずっと良くなっている。主張を強調されたことで説得力が出てきた。

4. 幻の天神丸：安居利次さん10'：5月例会で発表された作品に少し手を加えられた様だ。とにかく二度と撮られないであろう記録として貴重。大阪アマチュア映像界へOMCから出品してもらった作品。

5. 心の故郷紀行：有村 博さん9' 55"：ネパールの農村に的を絞って、日本でも昔はこんな風景があった、と郷愁を感じさせてくれる作品。

6. 海鳴り：河合源七郎さん4' 12"：或る作品展の記録。画もBGMも抽象的な雰囲気、一風変わったムードがあった。動かない画をどう映像表現するかの議論が続いた。

7. 負の遺産：関 剛さん6' 40"：例会で上映するために持参されたが、公開映写会出品候補昨ということで研究会でも上映。さすが関作品だけに見応えがあった。前会長の小倉さんなら、どんな批評をするだろうかとふと思った。

8. 炭に生きる：合原一夫さん11' 50"：5月例会で発表したものから3分縮めた

作品。

9. 阿蘇路あそBOY：江藤洋司さん9' 42"：4月例会発表作よりぐっと良くなったが、まだ脚本に課題が残る。

## 7月例会のレポート

暑さ厳しい7月例会日だが、室内は上着が欲しい位の涼しさで快適であった。今月の司会は安居氏、書記：関氏、デッキ係は河合氏と増池氏、受付兼照明係は渡辺氏の担当で進行した。

■出席者：有村、江藤、江村、岡本、奥、上総、河合、合原、関、中尾、那須、華岡、藤原、前田、増池、森口、森下、森田、安居夫妻、吉岡、渡辺、山本、石垣の24氏（敬称略）

■上映（今月の短評は関副会長です）

1. 城と桜 6分40秒 増池 茂さん  
先月と長さは同じだから、ただ指摘された箇所を入れ変えたと言うことか。流れとしては確かに良くなったと思うが、人物を撮った素材がこれ以外に無いのなら、花のカットをあと1分ほど切り詰めるべきだった。この作者に風景の撮り方についてはもう注文をつける必要はない。あとは構成方法と厚かましく人物をねらう根性をもっとほしい。

2. 青葉祭 5分35秒 岡本至弘さん  
久しぶりの出品を見て、その作風ががらりと変わったのにびっくりした。まずタイトルバックがミラーに映る踊りとは洒落ている。踊りの行列と堂内の多数の僧による読経は本来なら真っ二つに別れるところだが、踊りのなかに読経シーンを、そして読経僧から踊りの行列にオーバーラップしてこれを同時進行形にした構成方法はおみごとだった。現地音を残して映像だけインサートしたのも、音のショックがなく効果的だ。しかし地域以外の人にはここがどこか判らない。ノンナレだから高野山を示すものがワンカットは必要だろう。PTAや子供会などに忙殺され、作品をつくる機会がほとんどなかった作者だが、子供さんもおおきくなって役職からやっとなんか解放されたのだと思う。これからは、この作品のよう

なセンスで制作に励んでいただきたい。

### 3. 十年一昔 8分45秒 安居良枝さん

なんでもない日常の暮らしをこまめにビデオに収めている作者には感心する。かつての「犬と私」「頭の体操」「目から鱗」「夫の食事」なども家庭内の情景からうまれた名作だった。故障がちのエアコン、屋根瓦ふき替え、ソ連崩壊の新聞記事、花博見学、園芸や華道など、映像的につながりがないものをナレーションで強引に引っ張っていく独特の手法がこの作品にも活かされていた。ただナレーションと重なる天気図や「光陰矢の如し」のテロップなどは視覚的にも唐突で過剰サービスのような気がしてならない。記憶の薄れをパソコンのハードディスクに見立ててご夫婦が話し合うくだりは、筆者にもあてはまるだけに身につまされたが、デジタル数字が画面を覆い尽くしては消えていくなどの手法はご主人が実写の少ない歴史ものによく使う“て”だ。「ことビデオに関するかぎり夫婦間では目標が違う」と自認されているが、表現方法にどこか共通するところが多い。ここらはやっぱり夫唱婦随ということか。

### 4. 鬼は山の民だった

9分20秒 安居利次さん

「これは私説です」と作者の前置き。エンドになっておもわず「うへん…」とうなってしまう。こう言うのを電気紙芝居と称するのだろうか。九州の片田舎で“ト仙の郷”という温泉宿に泊り、「ト仙とはなにか？」からこの珍説が膨らんでいく。たしかによくできた“おはなし”だが、弥生人や縄文人から新幹線まで、たがいに関連の無いさまざまな映像がエフェクトされながら目まぐるしく入れ替わる。それに会話形式のご夫婦やりとりをうっかり聞き漏らすと何がどうなったのかさっぱり判らない。全部を会話で通したのは新鮮だったが、話の交換の“ま”が空きすぎたのはちょっと失敗。原稿を読む舞台裏がまる見えになった。だが作者の個性豊かな発想と型破りな構成は、起承転結を地でゆく生真面目な作品を見るよりよっぽど面白い。

### 5. 城と桜 9分04秒 有村 博さん

期せずして同名の作品が2題出た。こち

らは四つの城と桜の競演。「以前に長いと指摘され再編集したが、まだ長いと言われた」と作者。この単純なモチーフで4箇所もの城が必要かどうかだ。かつての作品に「日本の城」というのがあったが、城の個性がテーマだから四つでも五つでも鑑賞に耐えた。だがこの作品の主題は桜、城はどうみてもその背景にしかになっていない。背景が変わっても桜の花はみなおなじ、だから9分は長く感じるのだ。この作品の中では姫路城に比較的ウエイトが置かれていたから姫路城ひとつに絞られたらいかがだろう。作者が意図するところと違うかもしれないが。

### 6. 晋山結制法要

14分03秒 渡辺雄史さん

題名の意味は禅宗のお寺の新住職就任式だそう。このような神聖な行事を堂内で三脚に装着して撮影できたのは作者自身が関係者かそれに近い人だろう、したがってその時の模様が詳細に撮られている。めったに行われぬ式典だけに、たいへん価値ある映像に違いない。14分という長さはこの現場に関わった人にはこれでも短かいかもしれないが、例会の場では少々苦痛を感じる時間だ。これはこれで記録として残し、例会には一部を省略してお出しいたぐとよい。たとえば禅問答の場面など。

### 7. 四季美瑛 9分48秒 合原一夫さん

ところどころ雪が残る山々と対照的に麓の農園は緑の絨毯を敷きつめたよう。牛がのんびり草を食み、傍らでは元気な子供たちが嬉々として野草を摘んでいる。北海道ならではの雄大な景色と美瑛の幾何学模様が、まるで写真展へ迷い込んだように次々と展開していく。とくに白一色のなかで、孤独に佇む木がゆっくりしたズームで次第に遠ざかっていくラストは印象的だった。タイトルと北海道の地図が同一画面に混在して判りにくい。この作品に地図は必要ないと思う。春夏秋冬すべて音楽のイントローションが同じというのもちょっと工夫が足りなかった。作者にしては珍しくノンナレ、それを秀でた写真的構図がみごとにカバーしている。いつも同伴される写真家の奥さんの影響がかなり顕著に現われた作品

と感じた。

## 8. 夏祭 5分10秒 江村一郎さん

だんじりに向って跳ね踊る十代とおぼしき少女たちの異常なまでの熱狂振りにまず驚かされた。はっぴから肌が半分露出してもなお憑かれたように踊り狂う。進んで来ただんじりの舞台上汗を飛ばしながら声を張りあげる若い男が数人。それで少女たちのとった異常な行動が判った。彼らはジャンニズ系だ。それはともかく、この作者はカメラの前を人が横切ろうが立ちふさがろうが一向におかまいなし、それがかえって迫力と呼んでいておもしろい。ちょっと真似はできないが、たいへん勉強になる撮り方だ。途中、動きが完全に止まった箇所がある。知る人ぞ知る松村さんの店の前だが、これで平野の祭りであることは判明した。作者としては昼と夜のつながりと大先輩に敬意を表する意味があったのかも知れないが、惜しいかな作品の流れが中断していた。大方の人は、なぜ“まつや”の看板があんなに長く出てくるのか怪訝に思ったに違いない。これを切り捨て出来ないのであればラストの光量不足のシーンと入れ替えてもいいのではないか。ご一考を。

## 9. 負の遺産

6分40秒 (筆者) 関 剛

ポーランドのアウシュヴィッツを約2時間の見学で撮影したもの。心象映像を目論んだが、ツアーの一行に追いつくのが慌ただしく、思うように撮れなかった。最後に10分のトイレ休憩で、ひとり走り回って稼いだのがやっとこれだけ。徹底したカット不足を速度変換ソフトで長〜く伸ばし、プラハのユダヤ人墓地と合成してどうやら誤魔化した。ポーランド語やドイツ語が書かれた重要な場面に短くテロップを入れ、少しは心象に近かづいたかなと思ったが「心象ならテロップは要らない」と言われた。自分の作品は自分ではわからない。他人から言われて初めて気がつくことがある。なるほどの的を射た指摘だった。これは心象ではなく単なるイメージに過ぎない。勝手な思い込みに愕然とした。

## 10. みんなで守ろう湖国の魚たち

11分43秒 森口吉正さん

昨年6月に「湖国の魚たちを守ろう」と言うのがあったが、今回はその姉妹編。作品の趣旨もほぼ同じ、ブラックバスやブルーギルなど肉食外来魚を駆除し、年々その数を減らしている鮒や鮎を守ろうとする啓発活動の記録。と同時に、釣り揚げた外来魚までその場で放つのをカッコ良しとする風潮。漁協が仕掛け網に危険なルアーを引っ掛け、そのまま放置する釣り人たちのマナーも問われている。テントの下でおいしそうな天ぷらを揚げていた。捕獲したブラックバスを料理しているのかと思ったが、それが数を減らしているはずの小鮎とは意外だった。

## 11. 漁港サムネイ

3分10秒 山本正夢さん

最近入会された作者の初めての作品でノンナレーション。サムネイとはこの土地の名でベトナムの小さな漁村だそうだ。(帰って録画をよくみると「漁港ムイネ」になっていたが、どっちが本当かな?) 子供たちがお椀の舟と戯れ、牛の群れが波打ち際を歩くのんびりした光景からはじまるが、男が数人で砂浜の漁船をくるくる回すのは、海へ移動させているのだと後から聞いた。女たちが曳く地引き網には小魚がいっぱい。たぶん大漁なんだろう。砂浜にまかれた小魚に重なってテロップがひと言「魚醤の原料に」とあった。後にも先にも説明らしきものはこれだけ。海外物は普段見ることのない風景が多いだけにその意味が判らないと消化不良をひきおこす。長文のテロップなどはかえってマイナスだが、固有名詞とか簡単な画面の説明は必要だ。

以上で例会を終え、いつものように喫茶組とお酒組へと別れて二次会へ席を移した。

### ■原稿投稿のお願い

OMC ニュースも月によっては、記事量が少なくスペースが余りそうになります。そこでビデオ関係であれば、随想、ニュース等何でも結構ですから、記事投稿お願いします。分量は問いませんが、200～800字程度。送り先：前田宛、メール、手紙で。

### ■インターネット情報

ネット版ニュースでご覧ください。